

第七回 『Nウェイの森』(KOW版)と、
『フィンランドの駅』

考
え



声に出さずに
すましたい日本語
弦楽器イルカ  + 友人

■前置きは短めに

前回、「間違っても書いてみる」をコンセプトに、とりあえず俺が最近注目してる現実の出来事を過剰に盛ってみて、個人的にすごくすっきりした。特に『色彩を～』が社会的現実から何歩か距離を置き、二年前の震災も作中では起こったかどうか不明で直接は扱わなかったから、俺が世界の片隅で書く意義をより確認できた気がした。

さて今回は俺が『色彩を～』を読み解く。ただ公平に言えば謎解きは趣味じゃない。巷の謎解き本も「読まずにすます」派だし。でも今回はやりたいと読後すぐ思った。ただの読解じゃなくて、震災後に（おこがましさを∞で）書いた『Nウェイの森』につながれば、俺にも書く意味があると思ったから。

さらにUが「新作あんまり面白くない」って言ってたから、やるからには全力で、Uみたいな層がもっと本作を好きになるように書くつもりだ。ちなみにUは『色彩を～』について、「最近の春樹はいつも同じキャラばっかで『BOYS BE...』みたいだから飽きた」と言ってたけど、これは二つの意味で至言だと思う。

つまり、春樹はなぜ『BOYS BE...』的に（半ば意図的に）構成したのか読み解こう。そして終点である『フィンランドの駅』から、『Nウェイの森』まで続く北欧の大地を見渡そう。

なお、俺の読解スタイルは「作者の他作品も含め、文中に書かれている言葉だけをを用いる」という、センター試験国語の参考書（出口先生）から学んだ方法だ。作中以外からいろんな理論を用いて読み解く人もいるし、もちろん小説の読み方なんて人それぞれが一番だ。ただ俺は書かれてないことは推測しないのが、読者の公平さだという立場です。

■本題

さて、結論を引っ張るつもりはないので、とりあえず先に書く。

- 1、「色彩を持たない」主人公が、勇気と自信を取り戻す物語
- 2、『風の歌を聴け』→『ノルウェイの森』→『ダンス・ダンス・ダンス』→『色彩を～』と続く、春樹自身の歴史をなぞる作品
- 3、「灰田」は架空の人物（とも読めるように設定されている）
- 4、灰田＝緑川の言葉と、シロを赦す言葉が意味すること
- 5、『色彩を～』が二つの山を回避したことによる喪失感と、新たに回復する物語の再構築

- 1、「色彩を持たない」主人公が、勇気と自信を取り戻す物語

本作を大雑把にまとめると見出しの通りになる。

新聞の記事で、「色彩を持たない」とは「無関心」で「自己完結」した態度であり、「そもそも自分のことを色彩がないと思っている人はナルシスト」って批評を読んだ。

自分でもちょっと悲しいんだけど、腹を立てるほどひどい批評とは思わなかった。そういう側面はないワケじゃないと俺が感じたってことだろう。

ただ作中の主人公（以下つくる）は、傷を受けたことで「実質的に歩みを止め」「重みと呼べるものをほとんど持たなかった（P358）」過去を肯定していない。むしろ大切な人を手に入れたいともがいている。また「色彩を持たない」とはそもそも、「苗字に色の漢字がない」「特徴がない」という劣等感の原因として使われている（「もし自分が色のついた姓を持っていたらどんなによかったらろう(P8)」）。だから「色彩」に関して一方の意味だけ書くのはフェアじゃないし誤読だろう。

あと実際、著者の春樹自身もオウムや震災を扱った作品や、受賞スピーチや新聞への寄稿で現実問題とも関与してるから、他の作家と比較して社会に無関心と断定することもできない。公平にみればむしろ踏み込んだ発言をしてる作家の一人だろう。

さらに言えば、「その悪夢は一九九五年の春に東京で実際に起こったことなのだ（P349）」という文章があるけど、つくるが「実質的に歩みを止めてしまった」16年とは、オウム事件と神戸の震災が起きた1995年から、2011年の震災までと符合する（これはよく聞く話）。また同じ箇所、「狂信的なテロリストたちの攻撃の的にされたら」「想像を絶する悪夢」だが、「そのような惨事を防ぐ手だては今のところほとんどない」という文章があり、これは二つの年度から連想される電車と原発事故に共通する言葉だ。

つまり「実質的に歩みを止めてしまった」のはつくるだけでなく、この国の社会制度もだ、という指摘にも読める（ように書いてある）。オウム事件と神戸の震災で衝撃を受けたはずなのに、少なくとも2011年まで電車も原発も対策なんてしてなかった。

また16年前に友人から絶交されて自殺を考えたというつくるの設定は（確かに個人的で小さい事情ではあるけど）、震災で心を閉ざして自殺する人々が多数いる現状を踏まえて、同様の心境を描写している（ようにも読める）。ただ『神の子どもたちは～』のように、直接の被災者を登場人物にすることもできたはずだ。春樹はもしかしたら東北に縁がないから遠慮して書かない判断をしたのかもしれないけど、そこは賛否あってもわかる話だろう。

ここでブレイクタイム。先の批評はちょっと意図的な誤読っぽいけど、タイトルからの誤読といえば、『寄生獣』でミギーたちを寄生獣って呼ぶ読者と同じだ。ご存知の通り、ミギーたちは作中で「寄生生物」と呼ばれてて寄生獣とは一度も呼ばれない。かつ、たった一箇所だけ作中で「寄生獣」という言葉が使われ、ある生物を指すシーンがある。そう、アレね。これ、かなり終盤で明らかになるネタでそこまで題名を引っ張れたという演出が、やっぱネ申だね。再度の『寄生獣』ネタだけど、本当にネ申演出だからしかたない。

閑話休題。ここまでをまとめると、「色彩を持たない」とは大まかに三つの意味を持つ。

一つ目は、「苗字に色の漢字がない」。

二つ目は、「特徴がない」。

そして三つ目は、16年前までは「向かうべき場所」と「帰るべき場所」があり、「何かを強く信じることのできる自分を持っていた（P370）」が、16年前に友達から絶交されてからは、「実質的に歩みを停め」「重みと呼べるものをほとんど持た」ず、「向かうべき場所」も「帰るべき場所もない」「唯一の場所は「今居る場所」（P356）」という人生のテーゼを背負ってしまった、という意味だ。春樹を「無関心」「自己完結」と思う人がいるのはこの部分からだろう。

つまり強い個性を持っていないことが劣等感であり、友達に絶交されてからは他人と距離を置いてきたつくるが、大切な人（沙羅）や昔の友達（クロ）に励まされ、元々「カラフルな多崎つくる君（P328）」であり、むしろ「美しいかたちの入れ物（P322）」を目指して、電車が停まるための「駅をこしらえ（P324）」「具体的な色と形をそこに与えていく（P345）」という生き方があると気づき、勇気と自信を取り戻す物語だ。

ここまでは基本的な物語の要約。次は、作品間の連関の話だ。

2、『風の歌を聴け』→『ノルウェイの森』→『ダンス・ダンス・ダンス』→『色彩を〜』と続く、春樹自身の歴史をなぞる作品

『1Q84』もだけど、『色彩を〜』は春樹の過去作をコラージュしたような構成である。その理由は後に書くが、俺が注目するのは『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』との関連だ。

『風の〜』の僕は21歳の設定だが、20歳から8年間、「様々な人間がやってきて僕に語りかけ、まるで橋をわたるように音を立てて僕の上を通り過ぎ、そして二度と戻ってはこなかった。僕はその間じっと口を閉ざし、何も語らなかつた（P8）」と書かれており、まさに「色彩がない」途上の僕が描かれている。また高校時代「ビーチ・ボーイズのLPを貸してくれた女の子（P67）」に、LPを返そうと電話するが結局探し出せないというエピソードがある。（更に失くしたLPを返すために計3枚のLPを購入する）

それに対して『色彩を〜』では、「色彩がない」「容器」であるつくるは、高校時代の旧友たちと再会し、クロから「駅をこしらえなさい」とアドバイスを受ける。つまり、『風の〜』では実現できなかった旧友との再会によりその後の回復を描いたといえる。

またLP（三枚組）を置いていった灰田とは再会できない。灰田は「存在しない人物」としても描かれているので再会はないのかもしれないが、それは後ほど書く。『色彩を〜』のラストが風の音で終わるのも連関している。

次に、『ノルウェイの森』と『色彩を〜』のストーリーを連関させると以下ようになる。

まるで双子みたいに仲の良かった幼馴染の直子とキズキ〔五本の指（P170）みたいに仲の良かった五人組の友達〕だが、キズキが自殺したことで直子は〔つくるが離れたことでシロは〕精神に病を患う。直子と再会した僕は直子と生きたいと思うがうまくいかず〔つくるは沙羅に促され旧友たちと再会するが昔のように仲良くなることはなく〕、さらに若さゆえ直子を導く正しい言

葉をかけられず「僕は怖いんだ。自分が何か間違っただけをして、あるいは何か間違っただけを口にして、その結果すべてが損なわれ、そっくり宙に消えてしまうかもしれないことが(P324)」、結局直子も自殺してしまう「シロが殺されたことを知る」。最後はもう一人の大切な女性である緑に電話し「何もかもを君と二人で最初から始めたい」と伝えるが「君のことが心から好きだし、君をほしいと思っている (P345)」、自分がどこにいるのかわからず、どこでもない場所のまん中から緑を呼び続けていた。「行くべき場所もないし、帰るべき場所もない。かつてそんなものがあつたことはないし、今だってない。彼にとっての唯一の場所は「今いる場所」だ (P356)]

[] 内が『色彩を〜』からの引用だが、『色彩を〜』には『ノルウェイの森』にないこの先の展開がある。そのひとつが、自分を「駅」にたとえた自己肯定であり、もうひとつが、大切な人を手に入れたいと強く願うラストである。

そしてこのラストは、『ダンス〜』でユミヨシさんに電話をかけるラストと類似している。「いろんなことが一回りしたんだ。ぐるりと。そして僕は君を求めている」「とても激しく (P338)」「僕はここにとどまるのだ (P364)]

この流れを超要約すると以下のようになる。

『風の〜』から『ノルウェイの森』までは、直子を失い色彩を持たなかった。『ダンス〜』から二つの震災を経て『色彩を〜』では、大切な誰かを失いたくないとより強く求めるようになった。そして世界中で支持される作家となった事実が自己肯定へとつながった。

つまり『色彩を〜』は単なる小説というよりは、春樹自身の歴史をなぞった作品といえることができる。

ここまでが作品間の連関の話。次は灰田という登場人物が架空の存在であるという読解から、登場人物の連関の話だ。

3、「灰田」は架空の人物（とも読めるように設定されている）

これは見出し通りの内容なので、できるだけ原文を抽出して自ずと明らかにする。つまり簡単に言うと、映画『ファイト・クラブ』みたいな状況だ（と読むことができる）。

灰田は大学で知り合った友達で学生寮に住んでいるが、会うのはつくるの自宅やプールが多く、つくるは灰田の部屋や実家に行ったことはない。つくるの年齢から考えて大学時代には携帯が本格的に普及し始めた頃だが、灰田との連絡は学生寮の電話だけだ。（「寮に何度か電話をかけてみたが、そのたびに灰田は不在だと言われた (P129) 」）

そして、通常の間を描写する表現とは異質な箇所がいくつかあるので、まず以下に引用する。

「ひどくシャイな性格で、三人以上の人間が居合わせる場所では、いつも自分が存在しないもの

として扱われることを好んだ（P56）」

「図書館まで並んで歩いた。その間彼らはほとんど口をきかなかったが、それはとりたてて珍しいことではなかった（P121）」

「しかしそれでもなお、多崎つくるはその年下の友人を必要としていた。おそらく他の何にも増して（P126）」

「彼は父親の姿を借りて、自分自身についての何かを語ろうとしたのだろうか？ しかし今回の灰田の消滅はなぜか、前のときほど深い混乱をつくるにもたらさなかった。（中略）どうしてかはわからないが、灰田が自分の罪や汚れを部分的に引き受けて、その結果どこか遠くに去って行ったのではないかという気さえした。（中略）不思議なほど深く澄んだ一對の眼差しの記憶だけだった（P131）」

「自分が存在しないものとして扱われることを好んだ」「灰田の消滅」という表現を普通の人間に使うのは異質だ。つまり友達から絶交されたつくるが二重人格的に造り出した幻の存在としても読むことが可能である。

灰田の存在を証明するのは退寮届と休学届だが「退寮の理由についても、移転先についても、管理人は何ひとつ知らなかった」「休学の理由は個人情報であるとして教えてもらえなかった（P130）」とある。つまり灰田という人物自体は存在したのかもしれないが、脳内友人として勝手に妄想を膨らませていた可能性もある。それはプールで灰田と同じキックだと人違いするシーンから読み取れる。「間違いない。灰田の足の裏だ（P234）」という割には年齢も年格好も全然違う人物を灰田と思い込んでいた。また、過去に灰田の足の裏を見て泳ぐとき「その光景は彼に常に軽い意識の麻痺状態をもたらした（P121）」とも書いてあり、夢うつつの状態ともとれる表現となっている。

また灰田はシロとクロの性夢に現れる。これについては「二人を一組として考えるようにしていた。（中略）つまり一種の架空の存在として（P22-23）」「ミスター・グレイ。灰色は白と黒を混ぜて作り出される（P113）」「現実の持つべき重みがない。ミスター・グレイ（P116）」「たぶん現実には何も起こらなかったのだろう。あれはやはり意識の内側で生み出された妄想だったのだ（P120）」とも書いてあり、灰田自体がシロとクロの中間にあたる存在としてつくるの脳内で作り出された妄想と読むことも可能だ。

ここは謎解きだから「どうだ！」ってやるとこなんだけど、軽く流していこう。あと、「じゃ、沙羅も架空か？」って疑問も出て来るんだけど、沙羅はオルガと仲が良いという細かい設定が、実は沙羅の存在を保証する伏線となっている。（個人的には沙羅も架空の方が、つくるが震災を機に過去と向き合おうと自分で決意する物語、に落ち着く気もするけど）

ではなぜ、春樹はこんな変な仕掛けを作ったのか。ミーハーで表層しか読まない大衆に一泡かかすため？ んー、あるかもしれない。なんて冗談です。

一番は、つまり灰田という妄想かもしれない怪しい人物や、名前に色のついた人物たちを登場させることで、人物の存在を「記号化」したかったということだ。つまりUの言う、『BOYS BE...』化だ。

じゃなぜ、人物を記号化したのかというと、作品間の連関とつながってくる。つまり、「直子＝シロ」「緑＝沙羅」「レイコさん＝クロ」等、作品間でいろんな役割を重ねることで、登場人物を役者のように振舞わせて、「どちらの相に入り込んでいるのか（P228）」わからなくした。そしてそれが灰田＝緑川の言葉と、シロを赦す言葉につながっていく。

4、灰田＝緑川の言葉と、シロを赦す言葉が意味すること

『色彩を～』では色という記号を登場人物に持たせ、様々な役割を混合させている。

五本の指みたいだった仲間はバラバラになり、むしろ強い色＝特徴を持つ友達は、お互い仲たがいするようになった。それぞれ学生の頃とは違う生活をしており、若干色褪せてはいるが自分を許容して生きている。

一方「色彩を持たない」はずのつくるの方が、駅という趣味を貫き仕事につなげている（ちなみに春樹自身も読書という趣味を生かし作家になっている）。

ただシロだけは、「生命力がもたらす自然な輝きを失っていた（P201）」。これについては作中で「全体の色彩がまんべんなく褪せてしまった（P220）」という表現もあるが、「白は褪せる色ではない」というUの指摘が非常に興味深い。自分が輝きを失っていく事実、褪せることのないシロの心がついていけなかった、と読むこともできるかもしれない。（昔から春樹はよく、少女が大人になって輝きを失う様を書いている）

また、緑川は六本目の指を切ったかもしれないと書かれており、『風の～』で4本しか指のない彼女を連想させる。なお灰田が架空なら緑川も架空であり、つくる＝灰田＝緑川という存在になる。他にも灰田で連想したのは「鼠」色だ。緑は『ノルウェイの森』に出てくる最重要人物でもある。

それでは色と役割が混濁して来たところで、緑川の最後の言葉を引用しよう。

「君は近々東京での大学生活に戻っていきなろう」「この人生には生きるだけの価値がある」「俺にはただ、その価値なるものがいささか負担になっているだけだ。そいつをうまく背負いきることができない。たぶん生まれつきそういうのに向いていないんだ。だから死にかけの猫みたく、静かな暗いところに潜り込んで、その時が来るのを黙々と待っている」「しかし君は違う。君にはそいつが背負いきれるはずだ（P94）」

これはつくるが、灰田という架空の存在を用いて自分自身にかけている励ましでもある。また『風の～』で、「時が来ればみんな自分の持ち場に結局は戻っていく。俺だけは戻る場所がなかったんだ（P113）」と言う鼠の言葉とも重なる。また「緑川：緑」の関連から、緑的なポジティブさとして読むこともできる。

つまり『色彩を～』は、物語の登場人物一人ひとりに重きを置いた作品ではそもそもない。それぞれを色の配合のようにブレンドしてミックスした作品だ。

さらにそれが顕著なのが、つくるがシロを赦す言葉（P365）である。

誰よりも感受性が強い精神に病を患ったかもしれず、さらに実際にレイプされなければ語れないくらいリアルな体験を訴え、最終的には輝きを失った末にシロは絞殺された。誰も責める

ことができないほど悲惨なシロに対して、「それでも彼はシロを赦すことができた」と書かれているため、拒絶した読者がいるのは非常にわかる。ただ、上記を読めばわかるが、この赦しは単にシロへ向けた言葉ではない。つまり直子にも向けられているのだ。

直子が首を吊ったことで自分を赦すことができなかつた僕だが、その死は「前もって決められていた」と諦めることで、僕自身の過ちと、二人の未来を向こう側へ持ち去ってしまった直子の自殺も、どちらも赦すことができた、という意味だ。

『色彩を〜』は、まさに引っ張られるワールド型テーマパーク「春樹ランド」と呼べなくもない作品となっている。

さらに蛇足すれば、「色彩」と「震災」、「多崎」と「多彩」は一字違い、また、苗字に色のつかない多崎つくると木元沙羅、色の代わりについてる漢字は「木」「多」だけど、木が多いつてつまり木、木、木で……

つまり二人が重なると『色彩を〜』から『ノルウェイの森』に続く線路が見える。となれば、『色彩を〜』は『ノルウェイの森』と地続きであり、だったら裏タイトルは『フィンランドの駅』で決まりだろう。

5、『色彩を〜』が二つの山を回避したことによる喪失感と、新たに回復する物語の再構築

実はこっからが俺にとっての本題だ。世間はいつも俺と逆で、ここまでは本当はどっちでもいい話だったが、世間はそっちばかり評価する。でも誰も評価しなくてもいいから本番はこっからだ。いざ、極論！

はっきり言って小説の謎なんてどうでもいい。内容が面白くなきゃ意味ないって俺は思う。だって例えば、Uと俺が実は同一人物で一人二役で書き分けてます、ってネタバラシしたら、読んでる人は「え？」って驚くかもしれない。けど最終的には、「一人でも百人でも、とにかく内容が面白いかどうか」しか残らない。しかも実際、Uと俺は別人だしね。

だから灰田が架空とかどうでもいい話だ。それよりも、『色彩を〜』が大切な人を失いたくない、という強いメッセージを持っていることが、実は俺の書いた『Nウェイの森』と強く関連してくる。これには俺自身、ひどく驚いた。「こっち寄ってきたか、春樹」って思った。

KOWのあとがきにも書いたんだが、震災後だから人が死なない作品にしたい、そして俺の「童貞三部作」（青春三部作のパクリ）の特別編として『Nウェイの森』を書いた。すると『色彩を〜』ではフリーセックス派の春樹にしては珍しく、主人公は二十一歳まで童貞という設定だった。しかも大切な人を失いたくないという震災後のテーマも一致する。

俺が書いた『Nウェイの森』では、最後に僕が直子を選ぶ決意をし、緑と別れる電話のシーンがある。その決意が『色彩を〜』とつながっていると感じた。いや、俺も麻痺状態でどの相がなんだかわかんなくなってきました。

さて、それでは『色彩を〜』について、思うところを書いていこう。まず細かい点から。P343の「あるとき」は、「あのとき」のほうがいいと思う。あと、最後つくるから電話しといて、沙

羅がかけ直したと思われる着信は無視して「今は話すことができないんだ (P367)」ってのはなんか変。ちょっとカッコ悪い。

次に大きい点。震災について真正面から書いてほしかった、とは思わないでは、ない。あとの物語は本来、「旧友に会う」シーンと、「シロに会う」シーン、二つの大きな山があるはずだった。でも、旧友たちはみなつくるが好きで優しく、シロは亡くなり、この二つの山は平坦な舗装道になり『フィンランドの駅』まで労なく続いていた。正直、もっと荒れた道でもよかったのではないかと思う。例えば.....

つくるがレイプしたと信じて疑わないアオ。シロを好きだったからつくるを赦せないアカ。そして、輝きを失いながらつくるを恨んで生活してるシロ。心に闇を抱えた彼らとつくるが出会い言葉を交わした瞬間、そこにトンでもないケミストリーが起こる。どう？

そういえば、俺とUとのケミストリー話、前回長いから全部カットしたんだけど、本作でケミストリー出てきたからそれもびっくりした。つまり簡単に言うと、俺とUのケミストリーが回を重ねてだいぶ醸されてきたけど、本家「ケミストリー」は実際ノン・ケミストリーの方が良かった、ソコ堂珍のコレジャナイ感がすごく好きって話。クロノス「一卵性恋人」とかスネオヘアーやスパイラル・ライフみたいだって、例えのほうの方がわかりにくってオチ。やっぱカットしてしかるべきだったか。

んで、今回も長いからもう大オチにします。『色彩を〜』で二つの山を回避した春樹さんに一言伝えるとしたら、俺ならこう言うね。

謎なんかどうでもいいですよ。内容が、登場人物が、文章が魅力的かどうかじゃないですか？その二つの山を回避したら、まるで、あのクラーク博士が「BOYS BE...」で止めて「Ambitious!」って肝心なとこ濁すみたいな、声に出さずにすましたい英語って感じしませんか？

とりあえず今回はこんな感じ。

どうかな？（今回マジ疲れた）



世間では「村上春樹の新作」と呼ばれている作品の読み方、なかなか面白かったよ。春樹の私小説的な要素があるのかもしれないね。

今回の新作でいえば、謎解きとして読み解くことは難しいね。というより、それはちょっと野暮かもしれない。

1Q84がシュールリアリズムとして読み解いたけど、新作は印象派の絵画のようなものとして鑑賞したいと思う。

無機質な社会に染まり漠然と生きている今、人間関係でも自分を抑えた表面的な付き合いばかりだ。昔は違った。すばらしい仲間と毎日を過ごした時代は輝かしい。戻れるなら、あの頃に戻りたい。

まあ、普通の社会人なら同じような思いは、多かれ少なかれ抱いているのではないだろうか。普通の人とは徐々に進むところを、主人公の多崎つくるは、瞬時にして、色彩豊かな時代から灰色の時代に進むことになった。そして人生のある時期になってから、タイムマシンに乗るように、古い仲間と会いに行き、輝かしかったときの色彩を取り戻す、そういう物語だと思った。

この物語は、少々幻想的で虚構的な要素も盛り込まれているが、あくまでも、それはメインのイメージを強烈に残すための技法なのではないだろうか。

そういえば、春樹の初期の頃の小説で、ピンボールゲームの台が大きなホールにずらりと並べられたシーンがあったような気がするんだが、かなり印象的なシーンだった。ピンボールゲームの台のように派手でカラフルな物が無数に並べられたイメージは、映像や写真よりも、小説のストーリーとして文章によって脳内に再生されたほうが、より鮮明で印象的だと思う。

そのときは、ずらりと並んだピンボール台という視覚イメージがあったけれども、今回は輝かしい青春時代というイメージに置き換わった。

普通に振り返るだけでなく、虚構をおりませ、そして、ある理由で瞬時に色彩の世界から灰色の世界に移すことで、より鮮明に印象的に描かれている。

もちろん、作品には深みがあるから、単純に、色彩と灰色の比較だけではない。もし、色彩豊かな登場人物を描くなら、名前は白と黒は使わずに、もっとカラフルなものを使っただろう。白と黒は作品のなかでは、灰色への接続の役割も担っている。また、灰色の人物もでてくるが、こちらも無色と色彩との間の接続詞的な存在だ。細かく読んで、それこそ謎解き的なことをすれば、もっと深い何かが見つかるかもしれない。

というわけで、新作についてはこれくらいにしておいて、1Q84の続きを書かなければ。



考えるウマシカ～「いつフラゲ？ 今でしょ！」編：第七回 『Nウェイの森』（KOW版）と、『フィンランドの駅』～

<http://p.booklog.jp/book/70247>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70247>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70247>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ